「青い鳥はいなかった」の読書感

この本は、サリドマイド薬害被害児の親の会の設立発起人であり、長い間その代表者であった方が書いた本である。日本で最初といわれる薬害訴訟の活動の中で、「等しく我が子の、そして親である自分自身の幸福を求めて、父母の会に集まったはずの親達が、時として、懐疑心や攻撃性のとりこになり、相互に反目し、傷つけ合う結果」をもたらし、「被害者は容易に（時に親は我が子に対しても）加害者になり、加害者はまた被害者になり得る」という「人は曼陀羅模様の愛憎の歴史を織りなす」を「父母の会は、最も象徴的な絵図を示しているかもしれない」と、赤裸々にその時々の資料を「眼を通しつつ、ヘドの出そうな思いに打たれ」ながらも引用し「おぞましい修羅の絵巻の物語」を語っている。

一方、「障害児の親の会の主たる目的は何か」、「親の会の代表者の資質とは、何か」、「親の会の目指すべきものは何か」、「親の会の運動のあり方」等々を、非常なまでの冷静さと、深い洞察眼で触れている。例えば、「人の心に密着する仕事」が福祉職であり、「貧しい心を持っている者が、他者に対し親身になって寄り添うことができるはずがない」と述べている。また、「人間とはどうあるべきかの根元的な問いかけ」を疎かにする社会であってはいけないと、警告している。

何よりも、著者がサリドマイド被害者の親の会の設立発起人、代表者でありながらも、親の会に参加したがｻﾘﾄﾞﾏｲﾄﾞ被害でない親子の心情を想い、自分はサリドマイド訴訟の原告団に加わらなかった生き様には、脱帽の限りである。また、若くして「自死」に至る我が子の心の闇の経過を親として知り得なかった痛恨の心の痛みにも触れている。

障害者の社会的支援という形がいくら整備されても、究極的は当事者の心情にまで眼の行き届く、また寄り添い続けるものでないと何の意味もなさいということを、著者も活動の中で、時に中傷・非難を浴びながらも主張し続けていたようであるが、それだけに我が子の「自死」は痛恨の痛みであろうことは、容易に推測される。

かように、福祉の問題とは、多様で複雑とも云えようが、あくまで当事者の心情を優先し、未来までも寄り添い続け、「とまり木」を構築する視点が、唯一の方策へのヒントであろう。私も今後更に、心して取り組んで行きたい。ご一読をお勧めします。

（2003 年 09 月 08 日 記）